

刃物

国内外の料理職人に広く愛され続けている、堺の包丁。「堺打刃物」と称されるその高い技術は、どのような歴史のなかで培われてきたのでしょうか。

古墳時代(3世紀～)

古墳の造営にあたっては、当時の最新技術が用いられました。その中には、鋤(すき)や鍬(くわ)など鉄製農耕具も含まれ、鉄器づくりの技術向上が巨大古墳の築造(ちくぞう)に大きく寄与しました。



仁徳天皇陵古墳:写真提供/堺市

奈良・平安時代(710年～)

平安時代後期には、河内鑄物師(かわちいもじ)と呼ばれる金属鑄造(ちゅうぞう)の技術者が活躍を始めました。各地の梵鐘(ぼんしゅう)や大仏鑄造から鍋釜、鋤、鍬などの日常品まで幅広い金属製品を手掛けていました。



現代にも伝わる金属性農機具はこの時代にルーツがあります
:写真提供/大阪府立近つ飛鳥博物館

室町時代(1336年～)

応仁・文明の乱(1467～1477年)

応仁の乱で、京都が戦場になり都市機能を失いました。また、それまで遣明船(けんみんせん)の発着港であった兵庫津が西軍に占領されたため、堺津(さかいづ)が遣明船の発着港となり、国際貿易の起点になったのです。その後、南蛮貿易(なんばんぼうえぎ)により、様々な商品が取引され各種産業が堺を中心に発展してゆくことになります。

貿易による原材料の獲得、自由都市ゆえの製品の流通・販売ネットワークの充実、新技術の導入などを背景に、多数の鑄物師や鍛冶(かじ)が集まるようになり、堺では金属産業が盛んになりました。



南蛮屏風(左隻):写真提供/堺市博物館

15世紀ごろ、加賀国(現在の石川県)から刀工の流れを汲む包丁鍛冶の集団が堺へと移住したという説もあります。

鉄砲伝来(1543年)

ポルトガル人が鹿児島種子島に鉄砲を伝えました。これにより、戦国時代の戦法に大きな変化をもたらし、以降の歴史を転換させる要素になりました。また、堺は近江の国友と並ぶ鉄砲生産の一大拠点となりました。



堺鉄砲銘「摂州住極並屋伊兵衛作」:写真提供/堺市博物館

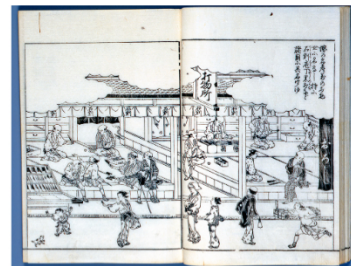
安土桃山時代(1573年～)

鉄砲が伝来したころ、ポルトガル人によって煙草(たばこ)が伝わり、これにより堺の金属加工の技術を使った煙草包丁が作られ始めました。(江戸期に入ってからという説もあります)

江戸時代(1603年～)

元禄年間(1688～1704年)や享保年間(1716～1736年)に、堺の職人たちが作る煙草包丁の評判がたち、産業として発展を遂げました。

日本刀と同様の片刃構造で、軟鉄(なんてつ)や鋼(はがね)を鍛えて作る打刃物という堺包丁の特色は、このころにはすでに誕生していたと思われます。



『和泉名所図会』巻二「打刃物所」寛政7年(1795)

:写真提供/堺市博物館

競争激化や煙草の製造方法の変化により、煙草包丁は衰退しましたが、包丁作りの伝統は後世に引き継がれていきました。



『煙草明細取調書』(明治5年)

東京国立博物館蔵

Image:TNM Image

Archives

昭和後期～現在

昭和57年(1982)「堺打刃物」が「伝統的工芸品」に指定されました。堺打刃物は、鍛冶職人(火造り)と研ぎ職人(刃付け)の分業制による伝統的な製法によって生産されています。

これらの流れを汲んだ「堺打刃物」の技は、現在も料理用包丁に引き継がれており、本職が使用する料理人用包丁では、国内シェア98%と言われるほど、プロからの圧倒的な支持を受けています。



用途に合わせて様々な形状の包丁が作られています
:写真提供/(公財)堺市産業振興センター



堺伝承館2階にある、堺包丁の数を展示している「堺刃物ミュージアムCUT」:写真提供/(公財)堺市産業振興センター

※参考文献
「堺—もの・ひと・こころ—」
編集/発行:堺市博物館